

かえ

還る家は ありますか

富田富士也

⑥

甘える勇氣

偏差値教育が浸透した世代の親子に多いのが、甘えられない悩みです。にっちもさっちもいかないとき、「助けてください」と他人に救いを求める勇氣がない。甘える勇氣とは、つまり、相手を信じる勇氣ですから、甘えられないとなると、命にもかかわります。成果や評価を常に気にして育った人は、自分が否定され傷つくのが怖いのです。リスクを避け、おとなしい「いい子」を演じるうちに、「困った子」になった際の身の処し方が分からなくなってしまう。そうした人は、万策尽きるまで親に手を掛けてもらった原風景も乏しい。だから、他人を信じられないのです。

「10億の人に10億の母ありむも、わが母にまさる母あり

イラスト・平松ひろし



相手信じ救い求める

なむや」とは、明治生まれの仏教家で詩人の暁烏敏の歌の一節ですが、ある家族との面談で、その歌心を痛感しました。きっかけは、「やんちゃ」な振る舞いで親を困らせていた高校1年の姉に、中学2年の妹が放った言葉でした。

「お姉ちゃんは、ぜいたくだよ。ちよつと良いことをすれば、お父さんも、お母さんも、すぐ喜んでくれる。無断外泊の後は、出かけようとするだけでお母さんが『行かないで』としがみついて心配する。私は正直うらやましかったよ」

感情が高まり、途中から涙声になりました。

「私は勉強も運動もできて病気もしないから、疎ましい存在かもしれない。でもね、「いい子」の私はお姉ちゃんと違って、夜を徹して親に心配してもらったこともなければ、甘えることさえ怖くてできないんだよ！」

初めて聞く妹の嘆きに、普段は荒れ気味の姉も「気づかなかった。つらかったね」としんみり。「ごめん」とうなだれる両親に、妹は「いいの。気持ち良かったから」とほほ笑みました。互いの存在を評価抜きに受けとめ、家族が「還る家」になった瞬間でした。

甘えてもいい。でも、他人の甘えも受けとめること。そんな体験なくして自立は望めない、私は思います。
(子ども家庭教育フォーラム代表)